

今日も先週の日曜日に続いて、山上の説教のみことばに耳を傾けました。これらのみことばで、イエスはユダヤの人々には小さい時からなじみ深い、それだけに普段の生活の中では空洞化しやすい、十戒を初めとする旧約の掟を取り上げて、それらの掟に込められた神のみ旨に対する徹底的な従順を説いておられます。これらのみことばを聴く時、私たちは性急に、自分には到底イエスが求めておられることは実行出来そうもないと思ってしまうかもしれません。それはそのとおりですが、イエスは私たちをそのような思いに陥らせるために、これらのみことばを語っておられるのかどうか落ち着いて考えて見なければなりません。イエスは私たちには到底実行不可能と思われる律法を押し付けて、私たちにあえて罪の意識を植え付けようとしてこれらのみことばを語っておられるのでしょうか。

先週聴いた福音の中でイエスは「あなたがたの義が律法学者たちやファリサイ派の人々の義に優っていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることはできない。」とされています。事実、イエスは律法学者やファリサイ派の人々のように、殺すなという律法の掟は殺人に限らず直接他人に危害を加えるような些細なことにまで及ぶと教えられるだけではありません。むしろ、先週私たちが聴いたとおり、この掟の前に身を置いて、周りの人に対する自分の心のありようを吟味するようイエスは私たちに求めておられます。そのような意味で、イエスが私たちに求めておられる義は、律法学者やファリサイ派の義に優る義です。けれども、それでは、イエスは律法学者やファリサイ派の人々が当時のユダヤの人々の肩に負わせていたのとは比べ物にならない、はるかに担いがたい重荷を私たちに押し付けていることになってしまうのではないのでしょうか。そしてそうなら、福音書を初めとする新約聖書全体が指し示している、私たちをあらゆる重荷から解放するイエスの福音と、山上の説教の教えとは全く相容れないことになってしまいます。

この袋小路から抜け出すためには、先程のイエスのみことばに戻ってもう一度考えてみる必要があります。「あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義に優っていなければ・・・。」とイエスは言われます。律法学者やファリサイ派の人々は、律法の掟を守ることによって義の道を歩もうとした人々です。イエスの度重なる批判にもかかわらず、律法学者やファリサイ派の人々は、少なくとも主観的には律法の掟を忠実に守ることによって、人間が歩み得る最善の義を追求しようとした人々です。掟を守ることによって神の前に自分の義

を確立しようとする、このような律法学者やファリサイ派の人々の律法主義に対して、イエスは神の側に立って、神の義を宣言しておられるのです。私たちがそれを守れるかどうかということよりも、私たちの目を律法の掟を通して示されている神の義に向けさせようとしておられるのです。私たちが耳を傾けてきたみことばに込められていたイエスの思いは、今日の福音の最後のみことばにおいて頂点に達しています。「だから、あなたがたの天の父が完全であるように、あなたがたも完全な者になりなさい。」

私たちの誰が、天の父である神が完全であるように完全なものでありえるでしょうか。イエスのこのみことばは、律法学者やファリサイ派の人々の律法主義的な義を完全に粉砕する宣言です。私たちがこれまで聴いてきたイエスの新しい掟のみことばは、わたしたちの力によっては実現不可能であることをイエスは宣言しておられるのです。それにもかかわらず、何故イエスはこのような私たちには実現不可能なことをあえて言われるのでしょうか。

「あなたがたの天の父が完全であるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」というイエスのこのみことばは、私たちが天地創造の神、私たち全ての者の父である神の懐に呼び戻そうとしておられるかのようです。天地創造のはじめ、神は御自分に似せて人を創造されたのです。私たちは神の似姿として創造された者たちであったのです。「あなたがたの天の父が完全であるように、あなたがたも完全な者となりなさい」とのイエスのみことばは、私たちが神の似姿としての本来の姿に呼び戻そうとする神の御心を代弁するみことばです。私たちの主イエス・キリストはその父なる神の御心を実現するために、私たちのもとに来てくださったお方です。復讐してはならない、ゆるしあいなさい。敵をも愛しなさい。愛においては敵などいるはずがない。これらのイエスのみことばは全てイエスが目指しておられる、父なる神がイエスに託された人類の再創造による神の救いのみ旨から発せられているみことばなのです。私たちは洗礼によって、イエス・キリストの十字架の死と復活によってもたらされた救いの恵みを受けて、神の子らとしてのいのちを生きる者たちとされたのではなかったでしょうか。

私たちの間のいたるところで繰り返されている、復讐が復讐を生み、敵味方に分かれて合い争う、人間の品位のかけらも感じられないこの世のありさまから救われる道は、私たちにはあまりにも理想主義的に思われるイエスの呼びかけに、私たちが応えることが出来るかどうかにかかっています。私たちには不可能と思われる道へとイエスは私たちに先立って進み行かれ、そのみあとに従うよう私たちに呼びかけておられるのです。その道は、私たちが知っているとおり、十字架の道以外にはありません。自分を十字架につけた者たちに一言の恨みも吐かず、彼らのためにゆるしを乞うて、十字架の上に死なれたイエスは、

身をもって、私たちが聴いてきた山上のみことばを生き抜かれたのです。不可能を可能にするのは、ひとえに愛です。イエスは神の子としての御自分の愛を私たちに示し、その愛に私たちを招くために、山上の説教で示された道を歩み通されたのです。私たちがイエスの求めに応えることが出来るとするなら、そのあまりにも困難と思える道を歩み通すことは、イエスの十字架において示されている、神の私たちへの愛を受け止めることによるのみ可能となるのです。私たちが求めるべきことは、イエスの求めに私たちが応えるための力であるよりは、このような困難な道に私たちを招くイエスへの愛と信頼です。イエスが求めておられることがいかに困難で、私たちには不可能と思われようとも、イエスが私たちの中に灯してくださった愛の炎が私たちの中に燃え続けることを、私たちのすべてを知ってくださるイエスに願い求めて行きたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高